

江戸の開帳札

— 信仰・行業にかんする情報の発信と受容 —

湯 浅 隆

一 問題の設定

二 開帳札について

論文要旨

本稿では、近世都市江戸を事例として、当地の人びとへの周知を意図した情報が発信された場所について検討していく。このための分析対象として、開帳予告の建札およびその設置場所を取りあげる。この分析をおし、江戸における情報メディアの発信地および受信地としての「広場」機能をもった場所や地域を明らかにしようとする。

開帳とは、本来は宗教者が行う布教のための一行事で、日頃は秘蔵され公開されることがない神仏の厨子を一定期日に限って開き、人びとに結縁の機会を与えるものである。十七世紀から十九世紀半ばにおける開帳をみた場合、その実施形態は時期と場所とにより様々であった。このなかにおいて十八世紀以降に、江戸をはじめとする大都市で行われた多くの開帳の目的は、本来の趣旨から外れて、寺社堂舎の修復費用を調達することであった。

このため、開帳の成否にとってもっとも重要な課題は、いかに多くの人びとを六〇日ないし八〇日未満に限定された開帳期間中に集めることができるかにあった。ことに、寺社が江戸以外の地にあつてこの期間だけ出府して行

三 江戸における開帳札の設置場所

四 おわりに

われた出開帳では、人びとへの事前の周到な宣伝が不可欠であった。周知のための方策の一つに、秘仏公開を宣伝するための木札の設置があつた。本稿では、この木札が実際に建てられるまでの過程と、江戸における設置場所とを明らかにする。このことで、江戸の人びとが恒常的に創り出していた、情報収集の場の存在というものを江戸のなかで浮かびあがらせていく。

情報発信の場は、江戸下町よりもその周辺部、ことに五街道をはじめとする交通の要路、なかでも木戸や御門という江戸市中と市外との境界の地に存在していた。江戸の開帳は、十八世紀後半になると行業としての色彩を強め、これにもなつて開帳場所を江戸の行業ゾーンの中核である隅田川沿いに集中する傾向を示した。これにもない、建札もこの地帯を重点的な設置箇所としていった。そのなかでも、浅草寺雷門前、両国橋、永代橋という橋と寺社門前とは、この種の情報発信の精度が高い場所、すなわち開帳の情報にかんする高度な「広場」機能を持った場所であつた。